

## 帰らざる道

— 外国体験と精神の許容量について —

実松克義

昨年の夏メキシコをバスで旅行してひさしぶりに異文化体験をした。スペイン語と食べ物で悪戦苦闘したものの極めて充実した時間であったように思う。出発点のメキシコ・シティーでは「アミーゴ」という安宿に泊まり、そこで何人かの日本人の若者たちと知り合った。いずれもアメリカ大陸、あるいは世界中を徒歩旅行して回っている連中で、一種独特の雰囲気を持っていた。それを一言でいえばある種の無鉄砲さからくる自由の気概とでもいうべきか。あらゆるものが窮屈に形式にはめられ、全ての人間が予定調和に近い人生を歩んでいる現代日本では欠けているものである。

日本を離れてこうした人種に出会うとじつにほっとす

る。しかしかれらの自由にも全く代償がないわけではない。かれらの目的は世界各地を冒険を求めて歩き回ることである。したがって偶発的な出会いはあるにしても、一カ所に長く滞在して現地の人々と親しく交わるというようなことはあまりないようだ。またことばの問題があるかもしれない。行く先々で現地のことばを不自由なく操ることなど不可能である。そこで旅は当然孤独なものになる。おそらく誰かが置いていったのであろう。宿の食堂には何カ月か（あるいは何年か）前の古ぼけた日本の新聞や雑誌があった。かれらはそうしたものを熱心に読んでいたが、それはあたかも自分の過去を知ろうとする努力にも似ていた。

かれらの中でもひととき風変わりな青年がいた。話してみても印象的だったのは、かれがほとんど日本語を忘れてきているという事実だった。特に長い複雑な文章を組み立てるのに苦労しているようであった。聞けばもう一年半以上も世界中を放浪していて、何カ月も日本人に会わなかったこともあるという。私は思わずかれに対して同情と羨望が一緒になったような感情を覚えたの思い出す。かれが何を探し求めているのかはよくわからなかったが、その勇氣には敬意を表さざるをえなかった。そしてそれが徒労に終わらぬことを祈った。

かれほどではないが私もまた以前に似たような経験をしたことがある。それは私のアメリカ留学である。もう今では遠い過去の記憶になってしまったが、その時の体験の強烈さは今でも生々しく迫ってくる時がある。それは総合的にみれば良い思い出である。しかしそこにはまた無限の困難さがあったことも事実である。特にことばとの戦いはほとんど拷問に近いものがあった。英語にはある程度の自信があった。しかしその自信も半日でつぶされた。相手の言うことがまるでわからないのである。以前に覚えたことは何ひとつ役に立たないばかりかむしろ邪魔になるような気さえした。全くのゼロからの出発である。

英語との格闘は先ず音を理解することから始まる。な



さねまつ かつよし 一般教育部助教授。一九四八年生まれ。日本大学文理学部地理学科卒業。カンザス大学大学院で人類学、英語教授法を学ぶ。英語教授法M・A。日本電気国際研修所、アテネ・フランセでコミュニケーションのための英語を教える。一九九〇年本学着任。シュミレーション・トラベルI/IIなど約一〇冊の著書がある。

ぜなら意味は音にあるからである。そして意味が完全にわからなくても音に対するある種の免疫ができる、戦いの場はより文化的なものに移行する。前者が感性に根ざしたものであるのに比べて、後者はより心理的な側面を持つているといえよう。問題はどちらも勝ち目の薄い戦いであるということだ。多くの優れたこれは語学力とはあまり関係はない。外国人留学生がそれを悟った時に挫折し、ある者は精神に異常をきたす。私は実際そういう人間に幾人か会ったことがある。しかしここで諦めては全ては水の泡である。開き直りというか、発想の転換が必要になる。そしてそれは私の場合「わかったようなふりをして生きる」ということであった。それは今でも外国語とつき合う最良の方法であると思っている。

さて私の英語の勉強は先ず日本語とのせめぎあいとして始まったように思う。アメリカ滞在の初期に私はよく夢を見た。しかも日本に関するものは日本語の夢をほとんど毎日のようにみていたように思う。それは普通の

夢の場合もあつたし、疲れた時の入眠幻覚や白昼夢に近いものもあつた。またある時には——とても不思議なことだが——以前日本で見た夢と全く同じレブリカを見たこともある。しかししばらくするとこうした夢もあまり見なくなつたように思う。何かが遠のいたのである。そして毎日英語でもみくちやにされているうちに自分でも少しは英語に慣れたように感じられるようになった。そうしたある時私は少しづつ日本語を忘れてきていることに気がついた。名詞、特に固有名詞がひどかつた。たとえば——ほんの二、三カ月前までは熟知していたはずの山の路線の駅名がほとんど思い出せないのだ。そんな馬鹿な！しかしいくら努力しても無駄なのでとうとう思い出すのをあきらめてしまった。

こうして私は半年以上の間ただ英語のみで暮らした。その間日本への電話を除けば日本語をほとんど話さなかつたように思う。自慢するわけではないがアメリカではこれがけっこう大変なことなのだ。幸い日本人が回りにいることをまだ知らなかつたし、それらしき顔を見かけてもアジア系の人間だと思わなかつた。運が良かったのである。そうしたある日——何のきつかけだつたかは忘れたが——日本から持ってきた本の一冊を読もうとした。たしか吉本隆明か誰かのやや理屈っぽい内容だつたと思ふが、一ページと先に進めなかつた。おかし。以前は

なじみ深かつた著者の概念や思考法が何ひとつわからな  
いのだ。ほかのものも読んでみたが結果は似たような  
ものであつた。新聞や週刊誌の記事のようなやさしい  
ものはこなせるが、ちよつと難しい論理になると頭がつ  
て行かない。あきらかに日本語による思考能力が落ちて  
いたのである。

今から考えれば当たり前のことであるが、こうしたこ  
とは当時の私にはある種の驚きであつた。なぜならそれ  
までの私は日本語とは不変の存在であると信じて疑わな  
かつたからである。それには正当な理由もあつた。たと  
えばそれまでも英語を初めいくつかの外国語をかじつ  
てみたことがあつた。たしかに集中してあることを学  
ぶとかかなりの進歩はするものである。しかしいつたんや  
めてしまえばあとはただ忘れるのみである——しかも情け  
ないほど急速に。そしていつもその背後には日本語の強  
い呪縛を感じないわけにはゆかなかつた。パンザイ！そ  
れが否定されたのだ。たしかにそれは結構なことであつ  
た。少なくとも英語の習得という点からは歓迎すべきこ  
とであつたに違いない。不可能であると思つていたこと  
が可能になつたのである。

しかし今から考えてみると、ことはそれほど簡単では  
なかつたようである。それからすでに十数年が経ち、仕  
事上、つい二年ちよつと前までは英語と日本語の二重生

活を続けていた。そして思えば私の精神は依然としてあ  
の時の激変から完全には快復してはいないような気がする。  
何が起つたのかはよくわからないが何かが変わつてし  
まつたのだ。そしてそれは何かと聞かれれば「私という  
主体」であると答えざるをえないだろう。この変化が私  
の人生に新しい可能性をもたらしたのは事実である。た  
だ私の英語への傾斜は私の日本語を英語的に——もつと正  
確に言えば非日本語的に——侵食してしまつた。精神の奥  
深くにおいてである。しかし圧倒的な影響を受けながら  
も、それを整序する何らかの糸口を見いだせないまま長  
い時間が経つてしまつた。その結果私の日本語は以前に  
も増していつそう奇怪なものになつてしまつたようであ  
る。

それでは英語はどうなのか。これもまた不完全であり、  
完璧さからは程遠い。第一わずか数年の滞米生活で自分  
の英語が飛躍的に進歩したとは思わないし、純粹に語学  
的な見地からはむしろその後に学んだことのほうが大き  
いように思われる。ただ日本語のいきさつと違って私の  
英語はその発端で極めて健康な創造物であつた。いわば  
どんなに小さくともある程度調和のとれた小宇宙である  
というわけだ。そしてそれをあまり使わなくなつてしま  
つた今、私はこの点では幸福な死を遂げることができ  
るのではないかと思つている。

外国体験をするということはそのまま無条件で外国語  
に上達するというのではない。その代償もまた確かに  
あるのである。それは外国語に上達するかしないかとい  
うことも直接関係はない。問題は長期にわたつて外国  
に滞在すれば人間の精神は必然的に母国語の厚い保護  
を離れて一人歩きをせざるをえないということである。  
それはいつてみれば個人の力を超えた一種の精神の真空  
状態を体験するというに外ならない。この力は巨大  
なものだ。そこでは全てが混沌であり、可能性も不可  
能性も、また天国も地獄も共生している。人はそこを經由  
して神にもなれるし破滅することもできる。そしてそれ  
がことばを学ぶということであろう。

再びメキシコ・シティーで会つたあの青年のことを思  
い出す。かれは今どこに居るのか。そしてかれの精神は  
未来に向かつていつたいていどういふ軌跡を描いて行くの  
であらう。